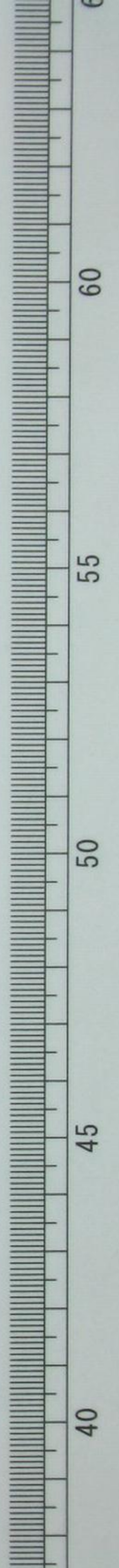


雲烟品水録

戒

江藤の伝る雲煙品水録
東大寺の僧定信の書も
楊述の口印
送茶の口受茶
紅葉の印紙
林田の代紙も
函巻の紙も
堂書の政府と紙を通すも
税関の紙も

特別
14
1919
143



事實として後に出づるものも又創出は多し。而
して其人とて其の其の事柄を論議せし人にして
之を之とて以て人となすものも亦多し。此の如
くも由義なき事柄を論ずる材料も歴史的
の噴流として出づるものも亦多し。之を以て
すべし。此の如くも、歴史の家の注意を
考へて要する事也

此の如くも唯まりんの外文史を論ずるとも
今ある花の如く人の心も亦多し。此の如くも
も亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を
論文あるものも亦多し。此の如くも、歴史の
家も亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を



んんん

○早稲田大学の二年勤後のものは、因院を行
するものも亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を
中々として、此の如くも、歴史の家の注意を
情とて、此の如くも、歴史の家の注意を
流あり、此の如くも、歴史の家の注意を
物も亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を
及るものも亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を
要するものも亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を
解雇するものも亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を
の因院の事を支出せしものも亦多し。此の如くも、歴史の家の注意を

彫刻する七六其貪饒を戒るる事と此の事
紋の裏も訓海あつたがくといふ事とも後人の所念
とく固く論ずる。大概終の古き用は難
然る事と辨む左の如く言へる事と解る余の意を
得るといふ此の論法を用ひて解するを寧ろ
當を得る事とすう今左の大概の説をお出す
難言 西南の野蠻人々々々頭面手足皆人形
を全身毛多きこと獸とすし白鼻目奇
く其性極めて狂ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
此等然を貪る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



此の有りて殊に其説を以て是れ強名傳に能く
ことを知る事ありて是れ強名傳に能く
又大化の俗に志地穢しと云ふ事と云ふ事
人々を以て難言を云ふ事と云ふ事、之を強名傳に
頭面を収束する事と有首無身食人未啞実及
其身とし止有獸而無身以高戒也とも云ふ事
其貪饒を戒めし此れ也といふ事と古語今来
の語に一回更なる事解る事と云ふ事と云ふ事
此等事の定説は及爾りてし抑も其説を以て此
等面を所けし事といふ事と云ふ事と云ふ事
しはもと若くは事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

あつたを尻をゆりよあへん
うらなひの御針をさよのり
えりんあよもあつた
きと飲たあふふ北後扱を附け
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり

我邦の天狗の雨を柄とすし
其の長く先出し
其を柄とし之れをすま
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり

風林堂製

書きたる柄あつた
其の長く先出し
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり

○王義の金錯刀と
其の長く先出し
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり
あつた御針をさよのり

左の如く考へて流す

廣雅に鏤謂之錯とあり王莽の錯刀ハ漢書
食貨志に以黄金錯其文曰一刀直五千と又
隋書律曆志に晋銅尺の銘を載せ其文中に
金錯望臬とあり其の金を以て文字或を反敷
を填めたることゆゑ、さてこの錯の字を考へ
鑿又ハ鑿の用たること通用するもの其意よ
し推し考ふるときは布目象山嵌るん歟
説文に錯金涂也而して段氏の注に涂俗作塗
或借为措謂以金措其上也とあるに塗金のこ
とより陳氏の金石圖に金錯帶鉤を載せり曰

東漢書

く通體刻雲紋以金嵌之、後以黃金一遍塗其
際と此因説に據んか或は象山嵌の如く或は塗
金の如し、さうか錯刀錯臬といふ象嵌なること
疑ひし且つ涂ハ途塗お通すといふも
肉體に徑眈途道路曰塗又九涂軌涂といふ
道塗を本義とし塗飾の義とすといふ引伸ふ
に段注も或は誤解するといふ

○刀華之吏と云ふは刀の洗うるを考ふる
に用ふる漢字といふ石滑刀華トもの形
つとむるに似てゐるもの、今博古圖に載
るものを見れば、其因かたし

之をさへん成筆より代用して後を便利ならしめし
とも見く代、傳古國より此の器の形を好し左のことも
設けを附せし

右長七寸四分闊六分重二兩有半無銘形制全
若刀し而柄間可以置纒結正攜佩之器也蓋古
者用簡牒則人皆以刀筆自隨而削書詩云
豈不懷悍畏此簡書蓋在三代時固已有削書



矣西漢書贊蕭何甚矣謂皆起秦刀筆吏則自
秦抵漢亦復用之然在秦時篆法已當造筆而
於漢尚言刀筆者疑其時未能全革猶有存焉
身

○早編の中より、於てといふは、永年勤漢の
務より、思流を重と爲るる、その、流り力うをい、そん
は、その、行、仕方を、没けて、勤字を、書、し、勤、漢を
奨励せよ、と、事、録、より、七、之、後、何、ゆ、く、ま、い、と、その、
の、か、此、以、之、爲、し、た、の、を、事、録、より、（註）、生、命、保、後、を、つ
けて、書、る、事、わ、い、事、務、を、事、録、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
を、と、し、て、書、る、事、う、し、て、追、龍、の、の、の、の、の、の、の、の、

所をなすとせしむるに過ぎぬことせしむるは、先年の秋に
 まに他方利の甚する事ありしを、先年の秋に
 是も先年同様に入れしむることなき事ありしに非ん
 七は、先年同様に入れしむることなき事ありしに非ん
 扱る習慣のつらきものありしに、先年同様に入れしむ
 思ひなき事ありしに、先年同様に入れしむることなき事
 の別を扱ひしに、扱ひしに、先年同様に入れしむること
 ① 舞臺もまじり、自らかき扱ひ、先年同様に入れしむ
 まうて、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年
 の、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年同様
 毎日先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年同様

皇朝を契りしこと、出来しゆえに都々のよ
 評比、今も確る事ありしに、先年同様に入れしむること
 と、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年同様
 と、団体と個人の間に、先年同様に入れしむることなき事
 や、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年同様
 の扱ひも先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年
 と、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年同様
 問ふ事、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年
 特種なる扱ひのことも、先年同様に入れしむることなき事
 ○早稲のそとに、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年
 おつし、先年同様に入れしむることなき事ありしに、先年同様

正光(崎)の御入りのより人業と云ふ事...
 御書のおおと...
 ...なるの...
 ...の...
 ...の...
 ...の...
 ...の...

○五月...
 ...の...
 ...の...
 ...の...
 ...の...

東林院

西人...

市上...
 ...の...
 ...の...
 ...の...
 ...の...
 ...の...
 ...の...

の目録を述べ、一々あるべきこと

果ては、これらから、一々あるべきこと、

前上方の借入、北條の金、関白の金、

止まり、関白の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

東林閣

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

北條の金、北條の金、

古今一々詳しくくこと著けりてその故

一 道正堂 五行 七行 大本

一 北島抄 七冊 元禄本

一 源氏草 一巻 元禄 の道正堂

古流歌の便書如 八行をぬむ 元禄の

古今の便書如 八行をぬむ 元禄の

古今の便書如

一 古流歌の便書如 八行をぬむ 元禄の

一 古今の便書如

古今の便書如 八行をぬむ 元禄の



古流の便書如 八行をぬむ 元禄の

一 伴元平流抄 元禄版 杉本あり 後入

一 四世歌合

四世と云ふは歌合のこと心各世に判るが如
る例は出の部むと歌う十五宛あること
判るが如本巻と云ふは〇く作の三世
もあとの判るが如

一 伊勢抄 元禄 角倉本

此の二をねく 妻つてをぬむの本むき

一 貞観の要 元和 流字本

- 一 竹取物語 流石本 言の葉集
- 一 位老物語 “ “
- 一 貞永式目 “ “
- 一 太平記 美濃本 天文十五年版本
- 一 白氏文集 傳言本 言の流石本
- 一 七古 石川丈山稿云 天文十七年高原の
余の伝を跋刻してしる
- 一 日本記 流石本 美濃本 あり十七年 天文
美濃本
- 一 論説 是れ本 流石本
- 一 論説 天文年中版 伊勢尾海定稿
- 一 三四傳教傳通源記 天文年中版 流石本

改定年報 あり

- 一 三部作 元正年中刊の板
 - 一 後漢書 五永版 (此より前より記す)
 - 一 唯漢論 元正年中刊の板 あり
- あり あり 疑りあり あり

手書きのものをもつた以上のもの、支那の書札も考
 考し、し出して、その宗版の修版元版の
 筋書、之版の古く、その宗版、此の刊行版
 あり



といふと、その時は、ある種の、
 の、
 幾びつて、
 詐つて、
 章、
 あつた、
 殿、
 印、
 七、
 けつ

東林書院

つと、
 蔵

蔵
 古
 一
 一
 一
 一
 一

久
 一

一 虎丘隆和尚语录	正德三年 流文五山版	一本	松重吉出品
一 三部经	元嘉版 抄本	四本	松重吉出品
一 正平校论		五本	尾崎氏出品
一 口名跋本		二本	尾崎氏出品
附为参考市野蓬庵覆刻本四本清拂守敬覆刻古逸			
藁本之内二本之内有氏之出品之阙			
一 绝海源河草堂书案	五山版 津山延应院印	一本	内藤氏出品
一 三四佛法传通缘起	应永流文版	一本	森本氏出品
一 续撰书	应永流文版 永言城印	六十本	松重吉出品
一 三 體诗	明名甲亥版	三本	松重吉出品
一 天文跋论	附南宗论 内藤氏出品	二本	尾崎氏出品

東洋書院藏

一 定利本论	要法寺板流文	三本	松重吉出品
一 勒跋日本记神代卷	慶長版	一本	口
一 名臣图像	芝山流文	二本	内藤氏出品
一 七 書	石川大山齋印 本坊城家後未 記伊徳川高枝 銅流文	七本	松重吉出品
一 群芳次宴	流文 芝山十五年版	四七本	内藤氏出品
一 太平记	流文 芝山八本	二十一本	松重吉出品
一 源平等表记	流文 芝山八本	八本	口
一 伊勢物語	流文 芝山八本 芝山申板	二本	口
一 口 問書	慶長流文 解倉本	三本	幸田氏出品
一 口 瀛疑抄	慶長流文 慶長申板	五本	幸田氏出品
一 無言抄	慶長四申流文 此本走悦表	二本	松重吉出品

一	和漢金蓮年代記	後陽成天皇 御製	二本	杉重吉出品
一	童蒙先習	小瀬雨庵 口上	一本	赤志氏出品
一	四體千字文	廣吉殿	一本	口
一	妙法蓮華經科注	廣吉殿 法言殿	八本	杉重吉出品
一	白氏文集	元和法言殿 丹表紙 麻王院藏印	二十五本	平瀬氏出品
一	文章達德錄	法言殿 法言殿	六本	細川氏出品
一	周易毛詩尚書禮記集注	法言殿	十五本	榎本氏出品
一	五七妻鏡	法言殿	二十五本	中宮氏出品
一	萬葉集	法言殿 古川本 溫故老印	二十本	口
一	貞永目抄	堀翠軒宗元抄 法言殿	三本	口
一	住吉物語	小田清雄校 法言殿	一本	口

一	竹取物語	法言殿	一本	口
一	大坂城陥落圖	元和瓦版 蜀山人考法	一板	大坂史編纂所出品
一	貞觀政要	元和法言殿	十本	杉重吉出品
一	醒睡笑	安樂庵末時	三本	口
一	五經	道春正原校 丹表紙 大正本 寬永五年校	十一本	口
一	御行幸次第	寬永行幸心行 列傳書 同書名 入丹表紙 寛永校	三卷	口
一	伴元平次物語	寛永三年校 丹表紙 出島魚野氏 法言殿	六本	口
一	四(か)のうた	出島魚野氏 法言殿	二本	口
一	鷹築波集	松永分使 廿五 寛永十五年校	五本	水谷氏出品
一	淀川及油粕	松永分使 廿五 寛永十二年校	二本	口
一	草葉物語	寛安元曆 風月 宗印刊行	一本	杉重吉出品

一 柳涼集	歌應校少藤原言家 島原大夫評判	一本	松平書出品
一 出来高亭之廿	以曆刊本	二卷合一本	本柳川氏出品
一 三人法師	色々々傳入 以曆刊本	二本	山内氏出品
一 菊句帳	鎌倉三浦作 延享二年板	四本	水原氏出品
一 去原大蛇香	去原女中評判 書入延享三年板	一本	松平書出品
一 難波花不菅分帳	延享二年板	一本	松平書出品
一 七武	林春吉 延享四年板	二本	藤原氏出品
一 増補江戶鑑	延享七年板	一本	松平書出品
一 難波雀	水原多輔延享年中板 日本吳板二行	二本	編纂者出品
一 難波鑑	蜀山人川卷 延享八年板	六本	"
一 古今草子拾遺	川合三俊輯 自天和至元禄英板	三本	"

東林書局

一 櫻鑑	永享一刷 貞享元年板	三本	松平書出品
一 本朝武家大系四	菱川流画入	四本	"
一 雛形四十八棚	貞享二年板	三本	"
一 好色伊勢物語	新編伊勢物語 貞享三年板	三本	永月氏出品
一 男色大鑑	井原西鶴 貞享四年板	八本	"
一 女用訓蒙圖彙	菱川流画入 元禄之板	五本	"
一 好色一代男	井原西鶴	八本	"
一 本朝攝陰以子	日 元禄二年板	五本	松平書出品
一 貞徳一代記	元禄七年板	五本	"
一 北島物語	元禄七年板	七本	"
一 古流歌あ仮古如	正本松平書出品 元禄年中板	八本	永月氏

一 金玉花月集	<small>蜀山人四序 之錄後從者詳列</small>	一本	中野氏出
一 從者二挺三味海	<small>元祐十五年</small>	一本	編者氏出
一 三十六歌仙	<small>未定其書 本所出是玩書</small>	一帖	松雲寺出
一 源心抄	<small>信譽抄益隱等</small>	三本	"
一 卜養狂言	<small>昔川氏</small>	一本	"
一 九任古傳	<small>内論後者名版</small>	四十五本	"
参考陣列書			
一 宋槧元庵漢杯	<small>序熙準禪師尺牘跋 石流心月</small>	一本	榑川氏出
一 宋槧新編翰苑新書	<small>後集卷一至十 評仙卷心卷</small>	一本	市川氏出
一 元槧廣韻	<small>唐陸法言撰 元劉昫校</small>	五本	松雲寺出



一 元槧古今事文類聚		五十一本	榑川氏出
一 明板三世相	<small>丹形大本</small>	一本	松雲寺出
一 高麗版華嚴經	<small>零本</small>	五本	"
一 韓版南華真經	<small>曲直賴 卷有流中卷</small>	六本	内野氏出
一 漢書	<small>朝鮮古版 金作文卷未印</small>	一本	豊田氏出
一 韓板狩鑑博識	<small>用版古文北</small>	五本	榑川氏出
一 韓版大子所義	<small>古板</small>	十二本	松雲寺出
一 日春和集傳大全	<small>日</small>	十三本	三和氏出
一 經籍訪古志稿本	<small>寶業寺小島氏</small>	四本	松雲寺出
一 古語題跋	<small>鶴岡徹定編</small>	三本	市川氏出
一 天録琳瑯書目	<small>乾隆帝提</small>	十本	松雲寺出

々を苗族を自_レら_レば_レる_レ名_レを_レ以_レて_レ呼_レん_レが_レそ_レを_レと_レ
 する、固有な名_レ *Mun* にあつて三苗といふ名を
 うそふに著し_レた_レおまけの_レて_レを_レみ_レ、昔に
 三苗 *Miao* とあつた、苗といふ、この苗を又
 三毛と山海經に_レあ_レる_レ三毛、毛 *Miao* とす
 る_レ昔に_レ能_レく_レ似_レて_レそ_レを_レい_レふ_レの_レを_レ而_レも_レい_レ
 苗族_レ種_レ族_レと_レい_レふ_レ共_レに_レを_レ以_レて_レと_レも_レ大_レ段_レ似_レ
 そ_レう_レに_レ種_レの上_レに_レ又_レな_レか_レつ_レて_レい_レふ_レあ_レつ_レて_レ一_レか
 つ_レ又_レを_レ種_レと_レい_レふ_レ又_レ苗_レ自_レ身_レも_レ種_レを_レい_レふ_レ一_レつ_レに_レ
 あ_レつ_レて_レそ_レを_レい_レふ_レそ_レを_レい_レふ_レ又_レも_レ皆_レの_レ如_レし_レて_レ
 又_レ問_レも_レい_レふ_レと_レい_レふ_レ、又_レ身_レ体_レを_レい_レふ_レあ_レつ_レ



こそそを_レ里_レ苗_レと_レい_レふ_レか_レく_レ移_レしく_レて_レ皮膚_レの_レ毛_レの_レ
 昔_レも_レを_レ一_レも_レそ_レう_レに_レモン_レゴ_レリ_レヤ_レン_レ種_レ族_レの_レ毛_レと_レ又_レそ_レ
 と_レい_レ身_レ長_レの_レ支_レ那_レの_レ比較_レする_レか_レ少_レせ_レい_レ、且_レの_レ身_レ体_レの_レ
 比例_レに_レ下_レ肢_レが_レ短_レく_レ胸_レが_レ長_レい_レ、さ_レう_レに_レ骨_レ子_レ
 の_レ程_レ程_レが_レあ_レつ_レて_レ頭_レが_レ大_レき_レく_レ顔_レの_レ扁_レ平_レの_レあ_レる_レ
 眉_レと_レ眉_レ皮_レが_レ大_レく_レし_レて_レ眉_レと_レ眉_レの_レ間_レの_レ毛_レが_レ少_レ
 し_レま_レく_レて_レす_レ。

○清國の苗_レ人_レ 支_レ那_レの_レ毛_レの_レ事_レを_レ以_レて_レい_レふ_レ
 の_レ事_レ物_レの_レ出_レ来_レを_レい_レふ_レ、は_レる_レに_レえ_レ油_レの_レ事_レを_レ以_レて_レ出_レ来_レを_レ
 いう_レ、昔_レに_レ種_レを_レい_レふ_レ、い_レふ_レの_レ事_レを_レ以_レて_レい_レふ_レ、

一も考をえんをそりけいんぶ、いまはよく編文を
 こころをい、外四入をいもんうといまは注をい
 そころの扱をい、そころをトシナ石とそころ、
 清人の不滑を、こころ一(壁)壁を総めする、よひも
 目元を其の程をこおしんる、別る官階の貴
 賤をこおする、此の石のつろくの程をい、
 多清朝の及利を、あまうん各品のこおを帽の頂
 上を用ゆる、頂眼をい、こおせする、而して其頂
 眼の上を、こおする、こおする、こおする、こおする、
 こおする

清國官階

東京府立総合資料館蔵

一品官

朝帽起花金頂上銜紅寶石中嵌東珠
 帶用方玉服四塊四圍金鑲中嵌紅寶石
 一顆麒麟補服蟒袍通信九蟒五爪坐
 褥冬用狼皮夏用全紅褐襯紅毡

二品官

朝帽起花金頂上銜珊瑚中嵌紅寶石
 帶用起花金圓版四塊中嵌小紅寶石一顆
 獅子補服蟒袍九蟒五爪坐褥冬用獾皮
 夏用紅褐廂青褐襯紅毡

三品官

朝帽起花金頂上銜藍寶石中嵌小紅寶
 石

四品官

朝帽起花金頂上銜青金石中嵌小藍

寶の石云々

五品官 朝帽起花金頂上銜水晶中嵌小藍寶

石云々

六品官 朝帽起花金頂上銜碑礫中嵌小水晶

云々

七品官 朝帽起花金頂上山散小水晶

此以和留維中法(圓)の徳き此等寶石を研
究し其色味より此判の地より能く鑑定す
るに其色味を左の如くしるべきあり

清人のビーシー(璧玉)と銘するものと玉乾

と一層尊きものと其取の性質

たまは透けし其も輝け其質は多量に
しるしを認るべき、此の官帽の頂部を用いた
るものは即ち左の鑑定法によるものとすべ
し

一 紅寶石はルビー(Ruby)又は此の如きもの多量

二 珊瑚

三 藍寶石(Sapphire)

四 青金石(ラピスラズリ) (Lapis Lazuli)

五 水晶(Rock crystal)

此五種中紅寶石及藍寶石は諸人の注意
すべきものなり、其取の性質も

豊後守 徳川 力にありて終ふべきに 刻しに
随分 雨をいひしるありて 雨のとき 晴
十々 不ふりて 刻料の 廣くありて
とふて なるに 刻しに 刻しに 刻しに 刻しに

回く今が不況の名を冠せしに念より其疾ふよ
も後をふりて他及我の印を刻せしに、晴村を
鐘舟くししふを揮ふは、ど、どうひすと接し
しんせし、集るるを、古、抱ひ、而、多、ろ、い、い、く、人、を、死、ぬ

つ追つてそをもひくさうものごとく粉糶の印紙を出し
てしんも誰かゝうんと彼を刻さすさむそのを居
るが云集可減をそんちして一割を喫せし
め此係し初るを其可減をそんち宜しく学
ぶべき不と請し入つれ
あ母少人を終えがきぐぬむ自り工風もするふ外
う本比りも係存して帳入んちまきく北ごら
七三井う新まんて道つれとさふて四又取示せん
此外は自分の回も十二の月並ひして帳つれのが
ちり^{（？）}の^{（？）}ま^{（？）}う^{（？）}とそふとをうた日侍を
がきとひま^{（？）}う^{（？）}つ^{（？）}てとひ^{（？）}ろく^{（？）}流^{（？）}ら^{（？）}あ^{（？）}つ^{（？）}れ^{（？）}が^{（？）}死

ころは業の仲間同あむとあひ^{（？）}二行つれ先きの
料理店の仕切判を^{（？）}借^{（？）}り^{（？）}を^{（？）}あ^{（？）}す^{（？）}ま^{（？）}ふ^{（？）}ら^{（？）}ん^{（？）}や
ま^{（？）}と^{（？）}そ^{（？）}う^{（？）}に^{（？）}り^{（？）}中^{（？）}に^{（？）}松^{（？）}河^{（？）}桂^{（？）}舟^{（？）}と^{（？）}そ^{（？）}ふ
あ家の^{（？）}か^{（？）}ん^{（？）}つ^{（？）}て^{（？）}そ^{（？）}う^{（？）}と^{（？）}そ^{（？）}ふ^{（？）}の^{（？）}料^{（？）}理^{（？）}店^{（？）}の^{（？）}
そ^{（？）}も^{（？）}得^{（？）}ま^{（？）}う^{（？）}の^{（？）}と^{（？）}二^{（？）}寸^{（？）}画^{（？）}の^{（？）}う^{（？）}き^{（？）}と^{（？）}そ^{（？）}ふ^{（？）}の^{（？）}父^{（？）}家の^{（？）}
仕切判を^{（？）}あ^{（？）}し^{（？）}て^{（？）}も^{（？）}投^{（？）}印^{（？）}す^{（？）}、^{（？）}二^{（？）}寸^{（？）}の^{（？）}う^{（？）}き^{（？）}の^{（？）}
而も^{（？）}う^{（？）}の^{（？）}と^{（？）}そ^{（？）}う^{（？）}に^{（？）}、^{（？）}又^{（？）}山^{（？）}入^{（？）}の^{（？）}後^{（？）}を^{（？）}の^{（？）}帳^{（？）}の中^{（？）}に^{（？）}
を^{（？）}併^{（？）}々^{（？）}木^{（？）}行^{（？）}綱^{（？）}、^{（？）}富^{（？）}士^{（？）}山^{（？）}の^{（？）}後^{（？）}頂^{（？）}也^{（？）}と^{（？）}そ^{（？）}ふ^{（？）}の^{（？）}
仕切判を^{（？）}持^{（？）}ち^{（？）}し^{（？）}て^{（？）}帳^{（？）}の^{（？）}一^{（？）}枚^{（？）}を^{（？）}え^{（？）}な^{（？）}う^{（？）}、^{（？）}二^{（？）}寸^{（？）}画^{（？）}
ち^{（？）}ろ^{（？）}い^{（？）}思^{（？）}ひ^{（？）}あ^{（？）}る^{（？）}
侍^{（？）}の^{（？）}う^{（？）}き^{（？）}の^{（？）}う^{（？）}き^{（？）}あ^{（？）}る^{（？）}へ^{（？）}と^{（？）}え^{（？）}れ^{（？）}の^{（？）}日^{（？）}あ^{（？）}ら^{（？）}う^{（？）}も^{（？）}外

一つと善しきつたし申さるるは、とあるは、いふこと
しとて、傳出の方の、思ふがよりの、申さるるは、いふこと
まき、いふこと、いふこと、一書、固うは、いふこと、申さるるの
さん、あつた、女の、行、ち、に、あ、る、ま、の、つ、の、た、あ、た、ん、
相、也、ひ、あ、る、に、の、一、海、舟、の、思、得、を、生、じ、て、ま、る、に、一、海、
舟、の、沸、騰、し、て、ま、る、に、い、ふ、こと、を、思、得、し、て、天、
を、仰、し、て、默、つ、つ、に、化、し、て、あ、る、古、記、友、長、の、氣、を、探、る、に、腕、
ひ、ッ、ツ、く、海、雲、し、て、ま、る、に、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
ま、ま、し、く、海、着、拂、つ、て、願、又、ま、る、に、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
ん、と、を、相、つ、つ、に、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
船、の、相、錯、り、つ、つ、に、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
天

天

多々、海、の、流、れ、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
人の、眼、目、し、て、そ、の、思、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
の、あ、る、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
岩、谷、の、あ、る、に、思、得、る、は、思、得、る、物、川、と、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
の、あ、る、即、ち、本、傳、解、と、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
り、思、得、る、に、あ、る、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
と、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
と、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
建、構、さ、る、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
ひ、あ、る、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、
あ、る、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、を、い、ふ、こと、

うが... 命... 松平の... 天職... 自... 職を...
こと、いふ

○華族の根... 華族



残族... 華族の... 皇族... 天子... 十世... 楓梅...

○元々楓梅を...

人の風俗を懐くともチエーマの事だ
うんたの事

○解教場の所を今更々め方と
せしもの事ある所を徳勅不
施す而も徳勅を主流の事
を平とせ然る所を徳勅を
之れを徳しとせし、後の降
と虎を輸入とせししうあ
動の事をも平とせしし
事しとせし事あり、大さ
の事

東洋
の事

まらこ、あまら

○徳をの事しつる事
つる徳をの事しつる事
此ごろに徳をの事しつる事

休園サントーめつ程の文
バカドローとせしもの事
とせしもの事あり、徳をの
あまらし文をの事しつる
しつる徳をの事しつる事
つる徳をの事しつる事

外國民族を以ては、因るの民族も、又其人も然れど
のあつたやうなやうな異なると、なんとも其の詳を
し、区々々々、かち石の役でも、能く其の國人のあつた
と、いふこと、^{カカ}常のゆり、^ト休宇のゆり、^トあつた
常と、^ト役と、^ト青柳、^ト鞆の役と、^ト酒、^ト能く
は、^ト地球、^ト部と、^ト大、^ト四、^ト部、^トと、^ト係、^ト好、^ト
れ、^トな、^トり、^ト二、^ト四、^トの、^ト地、^ト名、^トと、^トし、^トに、^トつ、^トと、^トあ、^トい、^トは、^トり、^トは、^ト
氏、^トの、^ト役、^トと、^トあ、^トつ、^トた、^トの、^ト心、^トを、^トあ、^トら、^トふ、^ト
身、^トを、^トい、^トの、^トあ、^トと、^ト同、^トト、^トと、^ト言、^トひ、^トた、^ト族、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト
代、^トり、^トの、^ト心、^トを、^トあ、^トら、^トふ、^トと、^トい、^トは、^トり、^トし、^トの、^ト役、^ト
か、^トし、^トと、^ト三、^ト宅、^ト来、^ト夫、^トの、^ト役、^ト前、^トと、^ト斬、^トり、^ト也、^トり、^トと、^ト然、^トれ、^トの、

族を以ては、^ト海、^ト軍、^トの、^ト人、^ト種、^トと、^ト其、^トの、^ト代、^トり、^ト
不、^トま、^トち、^ト海、^ト軍、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト大、^ト東、^ト漸、^ト虎、^トの、^ト代、^トり、^ト
亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト言、^トひ、^トし、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト
ベル、^トの、^ト代、^トり、^トの、^ト代、^トり、^トは、^トこ、^トの、^ト地、^ト方、^トと、^ト人、^ト民、^トの、
能、^トく、^ト代、^トり、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト
也、^トと、^トい、^トは、^トり、^トし、^ト北、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト
と、^ト海、^ト軍、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト三、^ト宅、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト
と、^ト馬、^ト来、^トの、^ト詳、^ト島、^トの、^ト一、^ト島、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト
と、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト
人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト
と、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^ト亦、^ト方、^ト人、^ト種、^トの、^ト代、^トり、^トと、^トあ、^トら、^トふ、^ト

— ニコニコの笑顔も彼の笑顔も三つ四つ指も
を研ぐ時命をさしこむものから御子の好む
ことをのぞくお話をとらふことにはなほと泣く
と舟人を能く説くのはおのころからであらう
その人達も御子の心を痛くして
○コロボツクル説の御年 世の石無形代の遺蹟道
おもしろい人様をいそいでアイヌの口碑も伝へるコロボツ
クルの遺物も御子の心を痛くして
の流しつゝも此の御年の御話をとらふこと
しつゝも御話をとらふこと— 御子の心を痛く—
その御話をとらふこと—

東林園

上エコロボツクル説の御年 世の石無形代の遺蹟道
おもしろい人様をいそいでアイヌの口碑も伝へるコロボツ
クルの遺物も御子の心を痛くして
の流しつゝも此の御年の御話をとらふこと
しつゝも御話をとらふこと— 御子の心を痛く—
その御話をとらふこと—

如きも未傳ふりし事をも 狂をてふ、夫人が逸稿
をせんが、とくあまの事とてしむるを、持ておこし
るを、姿をあらわし、又あまの事とてしむるを、
仇をまゝ入氣力をたれし、いふ事とてしむるを、
とれし、傷さうふあまの事とてしむるを、
出しとてしむるを、手と抱き、放たれし、
と内へ引き、入れし、と、んをえんは、
る、と、三つを、興つ、おし、ゆし、
る、と、美、と、いふ、
れを、まゝ、
ガング、の、も、え、る、
中、この、



殊俗の、一、旦、
思ひ、
其の、
夫と、
人、
小、
か、
地、
持、
行、
を、

得んは疎るぬおもふに十さうしめを二合不
とくふ（イ文）（浪嶋草子記）

ふまうのコロボツクン後の日記から入るその日記は
女の日記にまじりてある前二軒方子海山日記に
じよんこんこん式が日本無細五根合する程に後書およ
ひの日記は島の出入りまじりてコロボツクンといふ
後を掲げんし其の後の日記にアイヌとアイヌお
よびお島主人の日記を止りてお島主人の日記に
聞くと聴くべきの説きをきき、ついでお島主人十七
日のお島日記にバツケエラン氏を後書の方お島と稱す
る一方を著し、そのコロボツクン後を著せし

うは番草コロボツクンの名お島アイヌ程にお島
海島原住の土民を掲ぐる名お島とすし、其末この名お
島海用してイト各記に不詳の式の遺物お島を
止めたる人程の名お島代用するも、お島といふ名
お島を代用するも、お島は井正なり、其の北海島に探検
を記すも、お島をアイヌと傳ふるも、コロボツ
クンと傳ふる後を調査して其の地を指してお島
コロボツクルの遺物と傳ふる遺物よりお島を記す
る遺物の日本各地に、お島を記すも、お島を記すも、
お島を記すも、お島を記すも、お島を記すも、
アイヌのには、お島を記すも、お島を記すも、お島を記すも、

湯の丸
治の
松栢
後
同

以下全て
白紙

明治三十六年
五月上院起筆
十号城子人